

綺麗な印刷ってなに？

オーイ！皆んな元気でやってるか。先月号の我が家のバカテレビの話、読んでくれたかな？10万円も値切って買った、赤がピンクになってしまうインチキテレビの話だったんだけどね。あれから電気屋さんでスッタモンダして結局、テレビメーカーの人に話を聞いてみることにしたんだよ。そしたら、そのメーカー側の言うことがひどいんだぜ。「当社のテレビの『赤』は、この色です。お客様が『ピンク』とおっしゃられても、当社ではこれを『赤』と表現します」…でもさァ、どう見たってピンクはピンクだよ。昨年、プロ野球のセ・リーグで優勝した広島東洋カープが「赤ヘル軍団」じゃなく、「ピンクヘル軍団」になっちゃうんだもんな。まったく、あのメーカーのセンスを疑いたくなっちゃうよ。

●色彩と明るさ

てなワケで結局、色の綺麗な他のメーカーのテレビと買い替えることにした。今度は電気屋さんで例のピンクテレビの横に他のメーカーのテレビをいろいろ置いて、同じ番組の映り具合をじっくり観察してみた。そうして見ると一目瞭然。やっぱりピンクテレビの赤は他のどのテレビと比べてみてもおかしい。そうして見比べているうちに、1台のテレビがオレの眼を釘付けにした。すさまじく美しい色を出すP社のテレビだ。見れば見るほど綺麗な色彩感到感動してしまい「これに買い替える！」と店員に言う。この店員がまた「無愛想だがメカにはうるさい」ってヤツで、なんだかんだと理屈をこねるんだよな。「確かにこのP社の色彩は綺麗です。しかし、全体的に暗いでしょ。黒い背広を着た人を見て下さい。真っ黒けにつぶれてし

まっています。ところが、ピンクテレビは全体的に画像が明るく、黒い背広の襟やボタンまで綺麗に再現してるでしょ」…ウーン、確かにそうだ。色の乗りは良くないけど、明るくて鮮やかな画像なんだよな。しかし、印刷オペレータとして、この色の出し方は好きじゃないなァ。「色の乗りが悪くて明るい」…印刷の世界で言うところの「水上がりし過ぎた、眠たい印刷」ってヤツだもんな。それに比べるとP社の方は「色彩は綺麗だが黒をつぶす」…これも印刷に置き替えるとしたら「インキの乗りは良いけど、シャドー部分の網点がからんてる」ってとこかな。

●ベタ濃度と網点

なんだか、こうしてテレビを選んでいると、オレ達印刷の世界に似たものを感じちゃうね。ベタ部分の濃度をもっと濃くしたいんだけど、そうすると網点がつぶれてしまう。逆に綺麗な網点を出そうとすると、ベタ濃度が落ちて、眠たい印刷になってしまう。皆んなも結構経験してるトラブルなんじゃないかな？こんなとき、オレ達だと網点をつぶさないように固いインキを使って対処したり、版を焼き込んで網点を飛ばしたり、もう一度製版からやり直したりと、いろんな手を使えるんだけど、テレビの世界ではあまり手段がないらしい。そこでピンクテレビかP社の黒つぶれテレビかっていう選択になってしまったワケなんだけど、オレは個人的な趣味として、水上がりした、眠たい印刷が一番嫌だから、網点がからんでも色彩が綺麗で鮮やかな色を出すP社を買うことに決めた。

●人間の感性

例えば、オレが最高の技術を駆使して、技術的に非常にレベルの高い印刷物を仕上げたとしよう。ベタ濃度もドットゲインも色も艶も完璧…しかし、それをお客さんが喜んでくれるかどうかは分からないんだよな。オレにはオレのセンスがあり、お客さんにもその人特有のセンスがある。それが偶然マッチすればOKだけど、もしこのセンスが正反対のものであったとしたら、オレが何度刷り直そうと、いつまで経ってもクレームをつけられるハメになってしまう。ピンクテレビを「美しい」と言う人がいれば、「最悪の再現方法だ」と言うオレのような人間もいる。たくさんデータを取って「この印刷は最高の仕上げですよ」と力んでみても、それがその人のフィーリングにマッチしなければ、きつと気に入らないことだろう…これが印刷の難しさだよな。

●茜色ってどんな色

「成田さん、茜色っていうのは、どんな色ですか？」と、先日ある人に質問された。オレはそのとき「そうですね、金赤に紅を少し入れて、藍で濁したくらいの色ですかね」と答えたんだけど、印刷のことを全然知らないその人に、そんな答え方をしたって、分かるワケがないよな。「だからやや沈んだ赤色って感じですよ」って言い直したんだけど、色を言葉で表すって、とても難しいことだよな。「じゃあパステルグリーンっていうのは、どんな色ですか」…ええ加減にせえよ！と思いつつ「グリーンに少し藍を混ぜて、メジュームで薄めた色です」って答えちゃったんだけど、こうして考えてみる

眠たい印刷
センス
パステルグリーン
3色のピンク

と、オレ達みたいに「色」というものを「インキの銘柄で言い表わす」っていう手段をもってること、スゴイことだね。これだけでも結構、同じような色彩のイメージをもつことができちゃうもね。しかし、しかしだ、「パステルピンク」「フラッシュピンク」「ショッキングピンク」…この3色のピンクの差をどうやって説明する？…ワハハハハ、もう言葉では解説不可能だろう！

テレビの例のように人それぞれセンスや感性の異なるカラーの世界。そして言葉では表しきれない色彩の世界。オレ達オペレータは常にこんな厄介なもの付き合っているってワケだ。人それぞれに個性があるように、オレ達オペレータにも個性があっても良いんじゃないかな？とオレは思う。例えば「ラベルを刷らせるなら、アイツ」「水着を着た女性のポスターを刷らせたなら、アイツの右に出るものはない！」なんて、少し芸術の域にまで達するような、そんな印刷を望まれる時代がきたら、とつてもステキだね。そんなところから本当に綺麗な印刷が生まれるんじゃないかな？ではまた！

アッ！そう言えば、テレビの買い替えのおかげで追加料金を7万円もとられてしまった！破産じゃ！

(1992年3月号掲載)